

ウイルス感染に伴う心筋炎・心膜炎の臨床像

細菌やウイルスなどの感染によって心筋に炎症が急性発症する疾患が急性心筋炎である。多くの急性心筋炎は、かぜ様症状（悪寒・発熱・頭痛・筋肉痛・全身倦怠感）や食思不振・悪心・嘔吐下痢などの消化器症状が先行し、その後は数時間から数日の経過で心不全徴候（出現頻度 70%）・心膜刺激による胸痛（出現頻度 44%）・不整脈（出現頻度 25%）が出現することがある。発病初期に心肺危機に陥るものが劇症型心筋炎である。胸痛・息切れ・動悸を呈して来院したら、心電図・トロポニン・C 反応性タンパク質や赤血球沈降速度など炎症マーカーの検査を行い、それらが正常なら心筋炎は否定できる。

急性心筋炎に対する治療介入は、原因に対する介入・自然軽快までの血行動態維持・炎症性物質による心筋機能抑制回避である。劇症型ではない急性心筋炎は、炎症期が 1-2 週間持続した後に回復期となるため、入院による安静と、バイタルサインや心電図・心エコー図・心筋トロポニン値などの注意深い経過観察を行う。急性心筋炎が改善して退院できた場合の遠隔期死亡は少数で予後良好である。

細菌やウイルスにより心臓周囲の膜である心膜に炎症が急性に起こる疾患が急性心膜炎である。急性心膜炎では、胸痛が起こるとともに、心膜液が過剰に増えて心臓を圧迫しポンプ作用を悪くする心タンポナーデが起こることがある。しかし、ウイルス感染症による急性心膜炎は一時的に胸痛を伴うが、長く続くことは極めて稀である。

新型コロナワクチンによる心筋炎・心筋症の頻度は低い

すでに 3 億 2 千万人がワクチン摂取している米国では、30 歳以下の若者の Pfizer/BioNTech か Moderna の新型コロナワクチン接種後の心筋炎・心膜炎は 475 例（頻度 **0.0005%**）報告され、ほとんどは完全に回復している。500 万人超が Pfizer/BioNTech の新型コロナワクチン接種済みのイスラエルでは、心筋炎の報告が 275 例（頻度 **0.006%**）で、米国と同様に多くは 2 回目の接種後で、主に 16~19 歳の若い男性に認められた。

若年者で無症状の新型コロナウイルス感染合併症としての心筋炎・心膜炎がある

注目すべきことに、新型コロナウイルス感染の合併症として急性心筋炎が報告されている。平均年齢 19 歳の米国のアスリートで新型コロナウイルス感染者 1597 人において、**2.3%**にあたる 37 人が無症状あるいは軽症の心筋炎を認めた（*JAMA Cardiol* 2020 年 9 月）。したがって、若年者では新型コロナウイルス感染により無症状の心筋症を発症する危険があり、新型コロナウイルス感染による心筋症は新型コロナワクチン接種後に発症する心筋症よりも頻度としてははるかに高い。

新型コロナワクチン接種後に発症することが懸念されている軽度の心筋炎・心膜炎に関する日本循環器学会としての見地と対応

- ✓ 急性心筋炎・心膜炎が新型コロナワクチン接種後に発症する頻度は極めて稀
- ✓ 新型コロナワクチン接種後の急性心筋炎・心膜炎は軽症が主体
- ✓ 若年者では新型コロナウイルス感染による無症状の急性心筋炎・心膜炎発症の可能性はある
- ✓ 新型コロナワクチン接種により感染・重症化予防を図るメリットの方が、新型コロナワクチン接種後の急性心筋炎・心膜炎に対する懸念よりも圧倒的に大きい
- ✓ 日本循環器学会としては、新型コロナワクチン接種後に発症することが懸念されている軽度の心筋炎・心膜炎は、現在のワクチン接種体制および通常の循環器診療体制で対応可能と考える。